

## 井上英明著『列島の古代文学』

——比較神話から比較文学へ——

## 糸川光樹

冒頭から評者が自分を語る不作法を、まずお詫び申して置かねばならない。私は、この列島の、ある古風な町に生まれ育った。山あいの、霧深い町である。鎮守の森があり、古刹があり、街道沿いには、低い藁屋根の民家もあって、懐かしい前代の面影を残している。町の主な産業は、和紙、漆器、銅器といった伝統工芸品である。人間国宝級の名匠が何人もいるし、近頃急激に数が減ったとは言うものの、若い見習いの姿もある。名工たちはそれぞれ、居宅を兼ねた窮屈な仕事場で、薄暗い裸電球の光を頼りに、鼻眼鏡をして細かい作業に打ち込んでいる。実は私も、そんな手職人の一人である。さて、ある日の暮れ方の事である。その日も町に霧は深く垂れ込めていたが、海越えて西の方から吹き寄せる風に加減か、霧がかすかに薄らぎ、風呂敷を抱えて使いに出ている私の目の前に、突然、その巨大な塔が姿を現わしたのだった。私はわが目を疑った。一体これは「幻影」ではないのか！

なにしろ、見慣れぬ塔である。得体の知れない塔である。和風、洋風、いずれとも分からぬ。木造のようでもあり、煉瓦造りのようでもあり、すべてが蟹気楼のようでもある。それが、今、濃淡

の霧の背後に亭々と聳えているのだ。

読者の苦情の出ないうちに、稚拙な作文はもう打ち止めにするが、申すまでもなく私は、この霧深い伝統の街を「国文学界」に、腕ききの職人たちを「国文学者」に、そして忽然と出現した不思議な塔を井上英明氏の新著『列島の古代文学』に譬えたかったのである。だが既に「得たいが知れぬ」と言い、「幻影」かと疑いもしたからには、私はもう少しこの塔に近付き、おそらくは「迷宮」をなしているその内部に足を踏み入れて、その材質や構造やを、詳細に観察しなければならない。そしてその結果を『国文学研究』の読者に報告しなければならない。それが、非才を省みず執筆をお引受けした評者の義務である。

本書は、「底知れぬ過去の泉」、「新しい想像力」、「海外からの視点」の三部から成る。煮詰めて言えば、第一部は神話論、第二部は「竹取」と「伊勢」の論、第三部は「うつほ」と「源氏」の論である。著者の意図は、それらに一貫し、かつ世界の文学とも響きあう「時空」の意識、わけても「時間」の意識を論じる事にあると言えるであろう。（私見によれば、「時間」は文芸発想を分析する鋭利なメスであり、また世界各文化圏からの研究者たちが共通して語り合える最適の用語の一つでもある。）以下、本書の原文を切断し縫合しつつ、より具体的に紹介しよう。第一部に登場するのは、ポリネシア圏の伝承である。著者は、「国文学者」であると同時に、人も知る、マオリ神話の日本語訳者であり研究者であるが、こゝで著者は、虚空（テ・コレ）↓闇（テ・ポ）↓光（アオ）と段階的・継起的に進行するその宇宙創成神話を分析した後、次のよう

に問いかける。「記」・「紀」の旧辞に展開する日本の「天地創造」の物語も、その文献以前の始源に、遠く東アジアから太平洋ポリネシアの海洋に広がるこうした思索の「前史」を共有していたのではなからうか（41ページ）。第一部は、『竹取物語』および『伊勢物語』の主人公の造形や物語全体の形式を、「やはり古代英雄神の生涯の神話的パターンから考えてみた」（序説）ものである。『竹取』に関しては、それが三つの説話の型に解体出来ることを追認しつつも「全体にわたって登場するのはかぐや姫であり、したがってこの物語はこの女主人公に統率されつつ、生起する事件や登場人物相互の因果関係による人間心理における時間の必然的展開をみせている」（140ページ）とする。『伊勢』に関しては、現存テキストの中から古層をなす章段を摘出し、その「原伊勢物語」の「時間的構成」について、「青年期、壮年期、老年期、と大略三期に分けられ、昔男はそれぞれの時代において、変容——時間の推移——がみとめられるのである。そのことはとりもなおさず、原作者が一代記的構想で書いたことを意味するのではなからうか」（263ページ）と結論する。第三部の第一章は、『古今集』歌の英訳・フランス語訳、ドイツ語訳、ロシア語訳を吟味検討し、併せてそれぞれの言語における和歌翻訳の経緯を紹介する。第二章は「うつほ」における長編写実小説の側面と音楽的呪術に依拠する側面とを問題にする。「うつほ」の英雄達は（中略）古代旧辞的シャーマニズムと低次の仏教的シャーマニズムを清算しえなかった」（355ページ）と結論し、こうした「シャーマンの世界を可能なかぎり克服し、古代物語という様式に依拠しつ

つ、虚構という手段によって、人間の運命の諸相をきわめて自然に客観的に描き、人生の真実にかぎりなく接近したのが、いうまでもなく『源氏物語』である」（356ページ）として、第三章に入り、「世界文学」としての『源氏物語』を、縦横に論じる。その結論は、続く第四章に、以下のように記される。本書の核をなす部分なので長く引用する。『竹取物語』のかぐや姫や、『伊勢物語』の昔男、『うつほ物語』の後藤や『源氏物語』の光の君などの生涯には、その生涯から終焉に至るまでに、多かれ少なかれ、共通して存在する一連の経験的事実がある。彼らは王統につながる貴種として生誕し、少年時における精神と肉体の発育の異常性ととともに、超凡で特殊な能力を持っているが、生涯の一時期に必ず一度は異境・海辺などでの苦難や漂泊を余儀なくされ、またその際、処女（イデオ）を獲得し、以後、帰還して旧敵に勝ち、生栄をきわめると言われる。しかも、こうした一連の事実は、インド・ヨーロッパ系の神話・伝説はもとより、同時発生的ならともかく、これと直接的交流の可能性など、今のところ、神話伝播論では実証できない南太平洋のポリネシア人の、たとえばマオリ人の伝える壮大な英雄叙事詩圏にまで、基本的に類似する要素を数多くもっているのであり、それはやがて総合的文化史の一環として、世界文学史が書かれるときが来るようなことにでもなるならば、人間の一生がそのようでありたいと願って来た伝承の基本形式として、一国の文学史の枠を離れた考察が加えられることになるだろう。したがって、日本古代後期の物語という枠内での光源氏の一生の展開が、こうしたいわば人類に共通する情念の元型的な類縁

性に、一体いかなる理由でなおも咒縛され、しかも一方では、そうした普遍性の中に、決して解消し得ない独自性を創出し得ているかといった永遠の課題に、将来の日本における「源氏学」はますます直面し、また、していかなければならないだろう」(389ページ)。続く第五、第六章では、さらに、「源氏」の訳者アーサー・ウェイリーについての興味深い論考が展開するが、右に長々と第四章から引用した著者の「源氏」研究に関する見解は、そのまま、今後の「国文学界」への貴重な提言であり予言であると受け取ってよいであろう。

著者の古今東西に及ぶ核博な知識と卓越した語学力には、改めて感服する他はないが、それは措くとして、私が、ここで特に注目したいのは、著者が、いわゆる「国文学」の、考証的、文献学的先行研究への目配りを怠らず、よくそれらを踏まえて論を築いていることである。「比較の学」がともすれば陥りがちな上滑り、つまり思いつきや観念論と言った欠陥を本書がよく免れ得ているのは、著者自身がまず地道な考証学者であるからであろう。霧の町の伝統の匠の技を大切にされているからであろう。もし私の嗅覚が正しければのことだが、私は本書のページページに、しばしば本居宣長の、遠い移り香を嗅いだのだった。

もちろん、本書で著者が提出しているものは、なお、一つの作業仮説である。その仮説の正しさは、今後多くの研究者の細密な研究によって帰納的に実証されて行かなければならない。先駆者の仕事の常として、ブルドーザが荒々しく掘り起こしたこの研究の新道には、さらに手作業で耕されるべき土壌が幾つも残され横

たわっている。一、二の例を言うならば、日本神話の比較研究の対象が、本書では代表例としてマオリ神話に限られているが、当然、他の複数のアジアの神話も検証されなければならないであろう。「神話伝播論」と「神話同時発生論」との問題は本書でも決着がつけられていない。あるいはそんな二者択一的立論そのものに誤謬があつて、実は第三の論が可能であるのかも知れない。またあるいは、そういう問いそのものを、馬の足はなぜどこでも皆四本なのか、という問いと同様、そもそも無意味と考えるのか、など、著者に聞きたい点は少なくないのである。

巻末の「著者略歴」によれば、井上氏は、早稲田大学国文科の出身。大学院を了えて、一九六八年以来の十数年を、ニュージーランド国立オークランド大学、英国国立ロンドン大学の教壇で過ごされ、一九八一年帰国。現在は明星大学教授である。長い海外勤務の煩瑣に耐え、また帰国後は学務の要職を歴任されながら、よくもこれだけの研究を蓄積されたものである。その情熱と精進に、厚い敬意を寄せざるを得ない。

最後に、拙い「譬え話」に戻って稿を閉じたい。私は先に「見慣れぬ塔」だと言ったが、しかし実は似たものを、かつてどこかで目にしたような気もするのだ。連想されるのは、土田杏村の塔であり、土居光知の塔である。加えて、私の脳裏に浮かぶのは、バルセロナで見た、ガウディのサグラダ・ファミリア教会堂である。ガウディの塔は、建てはじめて百年、今もなお宮々と建築作業が進んでいる。